

機関番号：34319

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520096

研究課題名 (和文) 藤田嗣治の 1920 年代の絵画技法に関する総合研究

研究課題名 (英文) Comprehensive Research on Foujita' s Painting Technique in the 1920s

研究代表者

林 洋子 (HAYASHI YOKO)

京都造形芸術大学・芸術学部・准教授

研究者番号：30340524

研究成果の概要 (和文)：

画家・藤田嗣治が、1920 年のパリで国際的な名声を得た最大の理由に、彼が確立した「乳白色の下地」に、裸婦や静物を細く黒い輪郭線で描く独創的な技法が挙げられる。油性の地塗層に水性の墨で描く物理的な謎を生前の彼は秘密とし、死後も長らく詳細がわからなかった。本研究を通じて行われた、近年の作品修復成果の分析、技法再現、文献調査の照合によって、その秘密が「タルク(ケイ素とマグネシウムの水酸化物)」にあることが判明した。

研究成果の概要 (英文)：

Comprehensive Research on Foujita' s Painting Technique in the 1920s

The painter Foujita (Léonard-Tsuguharu Foujita) earned an international reputation in Paris at the beginning of 1920s, mainly because he created a very original painting technique known as “le grand fond blanc.” He used this technique to draw nudes and still-lives with a very thin black line on a milky-white ground. He never revealed the secret of how he was able to draw the line with water-based “sumi” on an oil-based ground. In the forty years since Foujita' s death, this technique has remained a mystery. As a result of our research--which involved the analysis of information gained from restoration of his paintings, reproduction of his technique, and research on Foujita' s writings--we have found that talc (magnesium silicate hydroxide, widely used in cosmetics and paints) is the key material.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	2,100,000	630,000	2,730,000
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	100,000	30,000	130,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：美術史

科研費の分科・細目：哲学、美学・美術史

キーワード：美術史、保存科学、藤田嗣治、絵画技法、1920年代

1. 研究開始当初の背景

明治中期の日本が生み、パリが育てた画家藤田嗣治(1886-1968)については、一般の知名度の高さとは裏腹に長らく学術研究が立ち遅れてきたが、2000年前後から日本に限らずフランスやアメリカなど国際的に、また美術史に限らず、その特有の絵画技法について保存修復の専門家からの関心など学際的な関心が高まった。2006年に東京国立近代美術館ほかが開催した没後最大規模の回顧展によって、ようやく全生涯にわたる主要作品の展示が実現し、履歴研究や関連書籍の出版も国内外で進んだ。そうした成果を踏まえ、絵画技法研究の進展が期待されていた。

2. 研究の目的

藤田の最盛期ともいえるべき1920年代に彼がパリで考案し、実践した独自の絵画技法——「乳白色の下地」に黒色の輪郭線で描き出した油彩画——について、美術史と保存科学の専門家が協力して総合的に研究する。

3. 研究の方法

初年度に藤田の絵画技法に関する国際シンポジウムを企画、準備、実行し(東京にて)、二年目の年度末にはその報告書を取りまとめて公刊し、三年目にはこの報告書を国内外の関連機関や研究者に送付する。

4. 研究成果

初年度、2008年12月6日に以下の内容で国際シンポジウムを東京藝術大学にて開催した。

国際シンポジウム「藤田嗣治の絵画技法に迫る：修復現場からの報告」

第一部 基調講演

10:10-11:00 「美術史における藤田嗣治の意義」高階秀爾(大原美術館館長、京都造形芸術大学・比較芸術学研究センター長)

11:00-11:30 「藤田嗣治とパリ日本館」篠田勝英(白百合女子大学教授、元・パリ日本館館長)

第二部 基調報告

11:30-12:00 「パリ日本館所蔵《欧人日本へ到来の図》《馬の図》(1929)の修復報告」

山領まり(山領絵画修復工房)

13:30-14:30 「エソンヌ県議会蔵《構図》《争闘》(1928)の修復報告」アン・ル・ディベルデル(エソンヌ県議会フジタコレクション専任担当学芸員)

第三部 研究発表

14:30-15:10 「藤田の1920年代の絵画技法」小谷野匡子、大川美香(絵画保存研究所)

15:20-16:00 「1920年代藤田作品の調査研究——パリ日本館所蔵作品を中心に」木島隆康(東京藝術大学教授)、渡辺郁夫(修復研究所21)、宮田順一(修復研究所21、早稲田大学理工学研究所)

第四部 ディスカッション

16:20-16:50 コメント 古田亮(東京藝術大学美術館准教授)、歌田眞介(東京藝術大学名誉教授)、佐藤一郎(東京藝術大学教授)

16:50-17:50 全体討議

18:30—懇親会

議論の中心を、近年、修復作業が行われた20年代の大作、パリ日本館の《欧人日本へ到来の図》《馬の図》(1929)、フランス・エソンヌ県が所蔵する《構図》《争闘》(1928)とした。今回の発表者が修復作業に関わったものである。開催日を、近隣の上野の森美術館で開かれている、エソンヌ県が所蔵する作品を中心とした藤田展の会期中に設定したため、修復を終えたばかりの《構図》《争闘》を実際に目にした上で議論できたことは、大変効果的であった。

なお、本シンポジウムは、国内でも先例のほとんどない、特定の作家の絵画技法をめぐる国際的、領域横断的な意見交換の場となった。開催当日は、学生や研究者だけでなく一般まで含めた多くの聴衆を得、また新聞雑誌などでの関連報道がなされた。

二年目には、このシンポジウム時の発表原稿に基づきながら発表者がそれぞれの原稿を再度整備して提出し、またシンポジウム以降に判明した事象などを盛り込む論文三本のあらたな寄稿も受け、木島と林が監修者となりとりまとめを図った。報告書は、『藤田嗣治の絵画技法に迫る：修復現場からの報告』と題して、2010年3月に東京藝術大学出版会より刊行をみた(1000部)。内容は以下の通り。

林洋子「はじめに——シンポジウム開催に至るまでの、かくも長き道のり」

高階秀爾「1920年代のパリと藤田嗣治」
篠田勝英「藤田嗣治とパリ日本館」

山領まり「パリ日本館蔵《欧人日本へ到来の図》《馬の図》(1929)の修復報告」
アンヌ・ル・ディベルデル(翻訳:松岡秋子)
「フジタの絵画技法の理解のために——未公開作品《構図》《争闘》(1928)の修復」

小谷野匡子・大川美香「藤田の1920年代の絵画技法—メゾン・アトリエ・フジタに残る画材類を手がかりに」
木島隆康、渡辺郁夫、宮田順一「パリ日本館所蔵作品を中心とした1920年代の藤田作品の調査研究—再現制作の成果報告」
コメント

古田亮「藤田嗣治と日本画の接点」
歌田真介「藤田嗣治の手製カンヴァスと私のエマルジョン体験」
佐藤一郎「水と油の絵画構造を操った藤田嗣治」

全体討議

木島隆康「修復事業からシンポジウムを終えて」

特別寄稿

宮田順一「藤田嗣治の地塗り再考」
宮田順一「パリ二本館修復事業における材料分析調査報告」
鈴嶋富士子「藤田嗣治《婦人像》の調査及び修復報告」

藤田嗣治略年譜
英文レジュメ

監修者・執筆者略歴

なお、シンポジウムの企画と報告書の作成作業と並行しながら、2008年度には国内の美術館で1920年代の代表作を所蔵する館と交渉し、作品調査を行った。大原美術館(《舞踏会の前》1925)、京都国立近代美術館(《タピスリーの裸婦》1923)。また、2009年度には年代的には1930年代作が中心だが、二科会への出品作など大作を多数所蔵する、秋田の平野政吉美術館での調査も実現した。いずれも、当方の調査だけでなく、先方の今後の作品管理や修復に関する意見交換をすることができた。

こうして科研費の補助によって実現した一連のシンポジウムと出版、作品調査活動を通して、藤田の1920年代の絵画技法が「タル

ク(滑石:ケイ素とマグネシウムの水酸化合物)」という物質によって支えられていた点で国内外の修復家、研究者の意見の一致を見た。地塗層については油性地か、半油性(エマルジョン)地かで見解が分かれているが、藤田自身が年代や作品によって使い分けていたことが十分考えうる。どちらであれ、この地塗層のうえにタルクを用いることで(タルク粉を布等に含ませて擦る、油にタルクと鉛白を混ぜてグレイズする)、特有の、半光沢の乳白色の画肌が得られることがわかった。本報告書は専門家に限らず、新聞や雑誌等でも幅広く報道され、刊行から一年を経て、印刷部数をほぼ配布し終えた。

また、出版後、この視点から所蔵作品の分析を館主導で、本科研費関係者の助言を受けつつ行い、その成果発表を行う美術館も出てきた(「レオナルド・フジタ 私のパリ、私のアトリエ」展、ポーラ美術館、2011年3月-9月)。

今後、1920年代に限定しないこの画家の絵画技法をめぐるシンポジウムの開催や公的研究費、関連出版へと展開する見込みである。報告書の一部については、海外からの翻訳の引き合いも来ている。藤田に限らず、助成を受けたこの三年間で、明らかに美術作品の技法研究の重要性の認識とその成果の社会への還元の気運が高まってきたことを実感する。これからも、保存科学と美術史研究の連携を継続していきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 林洋子「藤田嗣治の銀座をめぐる物語」『花椿』無、728号、2011、18-23頁
- ② 木島隆康「藤田作品にみるタルクの発見と裸婦像の肌色」『別冊太陽』無、158号、2009、158-159頁

〔学会発表〕(計1件)

- ① 林洋子「藤田嗣治」Japan To-day (『文藝春秋』欧文付録)研究会、2010年9月19日、国際日本文化研究センター

〔図書〕(計3件)

- ① 林洋子編・著、柏書房、『美術家のフランス体験 黄金の1920年代』2010、788頁
- ② 木島隆康・林洋子監修、東京藝術大学出版会、『藤田嗣治の絵画技法に迫る:修復現場からの報告』2010、145頁
- ③ 林洋子、名古屋大学出版会、『藤田嗣治作品をひらく』2008、511頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

林 洋子 (HAYASHI YOKO)
京都造形芸術大学・芸術学部・准教授
研究者番号：30340524

(2) 研究分担者

木島 隆康 (KIJIMA TAKAYASU)
東京藝術大学・美術学部・教授
研究者番号：10345340